



2025年12月26日
第106号

JR東労組 Yokohama



JR東労組横浜地本

発行人 梶田 優一
編集情宣担当

ホームページ

<http://www.ireu-yokohama1.jp/>



12月25日号

イーハトーブ

福島第一原発3号機で予定されていた小型のドローンを使った調査が、2026年1月以降に延期されるという報道がされた。原因是、ドローンを格納容器の中に送り込むための装置が、貫通孔の途中で止まってしまったからだそうだ。福島第一原発事故からもなく15年を迎える。しかし、事故を起こした原発に残された燃料デブリは880トンあるとされているが、15年経つて取り出された燃料デブリはわずか0.7グラム。耳かき一杯分にしかならない。これほどまでに技術が進歩した現代で、耳かき一杯分しか取り出されないと、いかに困難な作業だと感じるし、一度事故が起これば人間には制御できていないものが、現在も稼働していることに恐怖を感じる。

その一方で、北海道泊原発3号機の再稼働に向けて地元合意が進み、知事も同意したとの報道があった。理由は「電力の安定供給、電気料金の値下げ、経済効果、脱炭素化」とされている。しかし、再稼働までに必要な安全対策費用は約5150億円とされている。これだけの費用があれば、再生可能エネルギーや省エネ投資に振り向けることで、同様に電気料金の低下や経済効果を生み出せるのではないか。脱炭素化も発電時だけの話であり、建設や維持管理には二酸化炭素排出が伴う。福島第一原発の復旧にどれほどの機材と二酸化炭素の排出が費やされたかを考えれば、原発が「環境に優しい」とは言い難い。

私が原発に反対する最大の理由は、未だに使用済み核燃料の最終処分場が決まつていない「トイレのないマンシヨン」状態であることだ。10万年もの間、人間が管理できる場所は、地震大国日本には存在しない。到底解決できない問題だ。一度事故が起きて手に負えないような代物を動かしてはいけない。目の前の利益に騙され、この先の未来(子ども)に負債を残してはならない。私は未來永劫、安心して暮らせる社会を残すために声をあげ行動していく。

(K.O.)

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちも外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。